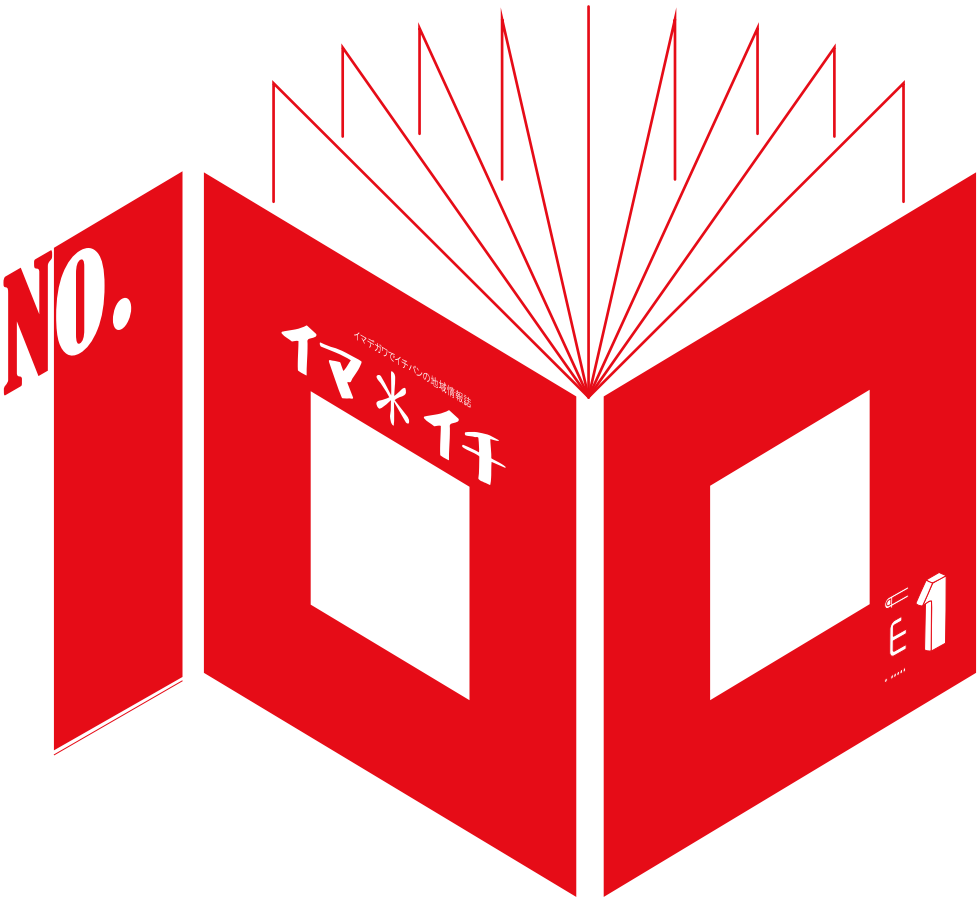
イマデガワでイチバンの地域情報誌

イマ＊イチ

2024 7月号

100号記念号！



ANNIVERSARY

100号特別企画

小原　克博 学長

スペシャルインタビュー

TAKE FREE

同志社大学
今出川校地
学生支援課

×

同志社大学
広告研究会
add's

special

100 号特別企画

interview

スペシャルインタビュー

同志社大学　学長

小原 克博（こはらかつひろ）

2025 年、
同志社は創立 150 周年を迎える。

このインタビューでは、
150 周年という節目に向けて、
今年 4 月に同志社大学の学長に就任した
小原学長に地域との連携に向けた
取り組み、そして同志社の未来像
について深掘りした。

CONTENTS

02 **100 号特別企画**
「スペシャルインタビュー：小原克博学長」

04 **レポート**
「パブリックヒアリング」

06 **特集**
「イーサン」「カプリ食堂 Limone Verde 今出川御所店」

08 **レポート**
「新入生歓迎特別講演会：綿矢りさ氏」

10 **おしえて！私のクラブ・サークル活動**
「茶道部」「Meahula Nohealani」

12 **出張版スポーツアトム**

14 **CAMPUS INFORMATION**
WOT・CT

16 **レポート**
CLAP「演劇ワークショップ 2024」

18 **ボランティア支援室だより**
コラム「私とイマ＊イチ」

20 **読者プレゼント**
編集後記

100th

このたび当誌は読者の皆様、
地域の皆様のご支援のおかげで
100 号を迎えることができました。
今後も地域の魅力と同志社大学の「今」を
伝えられるよう努力していく所存ですので
どうぞご愛読とご支援を 賜りますよう
お願いいたします。

”新島襄の精神“をもつ 学生を輩出し、大きくなっても 輝く大学でありたい

イ：インタビュアー

小原：小原 克博 学長

「同志社150周年に向けて」

イ：学長のご就任おめでとうございます。

小原：ありがとうございます。

イ：今後の同志社のビジョンについて考えをお聞かせください。

小原：来年で同志社は150周年を迎えます。この特別な機会を活用し、これまでの大学の歩みを総点検するとともに、さらに発展するためのビジョンや目標をしっかりと考え、その道筋を示す必要があると考えています。教育研究や社会貢献といった大学の役割をいずれも前進させたいと思いますし、社会貢献には地域との連携も含まれています。キャンパス内で完結する大学ではなく、教育研究の知的リソースを社会に還元し、新しい価値の発信源でありたいと思います。同志社の魅力を外に向けて発信し、多くの人に関心を持ってもらえるようにします。

イ：それは学生だけでなく、幅広い層に対して同志社の魅力を伝えたいということでしょうか。

小原：そうですね。受験生に対して同志社大学の魅力をしっかり伝えることはもちろん大事ですが、偏差値だけでは測れない魅力もあるということを強調したいです。キリスト教教育やこれまで培ってきた教育など、同志社大学で学ぶ意義を伝えていきます。

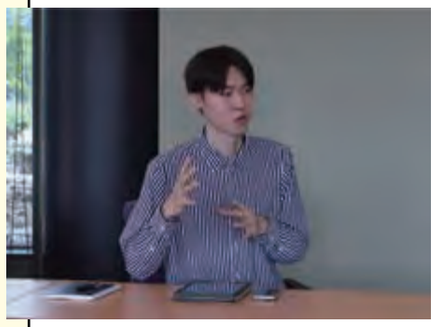
「地域と同志社の連携」

イ：イマイチは今出川でいちばんの地域情報誌をコンセプトとしたフリーマガジンです。今出川についてどういった印象をお持ちですか？

小原：今出川は住宅地や飲食店など複合的な街並みを形成していますね。大学の南には京都御所があり、北側には相国寺もあります。多種多様なセクターに囲まれたユニークな位置にある唯一無二の大学だと思います。

イ：その今出川で同志社大学がどのように地域と連携していくか、お聞かせください。

小原：多くの学生がいるとトラブルも発生し、ご迷惑をおかけすることもあります。ですが、学生と地域の方が接する機会も多いため、同志社の存在が地域に喜ばれる関係を築くことが理想です。キャンパス内の学生や教職員には広報物や連絡を通じて大学の様子を伝えることができますが、地域の方には積極的に情報発信をしないと大学が何をしているのか伝わりません。地域の方に丁寧に大学の様子や学生の考えを伝えることで、同志社に対して愛着や愛情を持ってもらえるような適切な情報提供が欠かせないと考えています。



イ：地域に愛されるための連携が必要ということですね。京都にはあらゆる企業が存在しますが、そうした企業との連携やスタートアップ支援を進めるための考えをお聞かせください。

小原：産学連携は今後の大学が本当に力を入れないといけない部分だと思います。日本はスタートアップ企業の数がまだまだ十分ではありませんし、大学発のスタートアップの誕生を積極的に促進したいと思います。地元に根差した起業も可能ですし、京都の町屋を活かしたスタートアップもあります。学生たちが起業家マインドを持ちチャレンジすることを支援したいですね。

「同志社の未来像」

イ：同志社大学の未来像について伺います。同志社の現在の課題はどこにあるとお考えでしょうか。

小原：大きな課題は、組織が大きくなることで一体感が失われつつあることですね。各学部の壁が少し高くなっている部分があるため、学部の壁を越える必要があります。1つの学問領域だけで社会課題に対する答えを出すことはできません。複数の学問領域を絡めながら、共に学ぶことで課題解決に向かいます。自分だけの領域を飛び出し、他の人と手を組んだり、話を聞いたりしながら、課題に向き合う必要があります。複数の学問領域や文理を超えて学ぶことで、社会課題に対応できる知識や経験を身につけられる大学でありたいと考えています。また、自分の領域を超えていく大胆さを学生に持ってほしいと思います。

イ：学生が学問の枠を超えて社会に出て、そこで活躍してもらうために大学として支援したいということですね。

小原：そうですね。それは新島襄自身がそのような人物だったからです。同志社教育を考える上で重要なキーワードは「倜儻不羈（てきとうふき）」です。才気がすぐれ、独立心が旺盛で、常軌では律しがたいことを意味します。新島は鎖国の時代にも日本を飛び出していくような、『飛び出し力』を持っていました。新島は、国が求めた枠に収まる人物ではなく、枠からはみ出す血気盛んな学生を育てることを望んでいたんです。自身を取り囲んでいる境界線を越えていく力、まさに『飛び出し力』です。与えられた枠を飛び出して挑戦する学生を育てることが理想です。これが同志社のレガシーだと思います。ですから、同志社大学もその精神を継承し、どんなに大きくなっても輝いている大学でありたいと思います。これで新島が願った大学であり続けることができると思います。

イ：新島襄の精神を持つ学生を育て、社会に輩出していくということですね。私もその精神をもって社会に出ていきたいと思います。本日はありがとうございました。

PUBLIC HEARING

5月8日（水）、5月10日（金）の2日に分けて、今出川・京田辺の両校地でパブリックヒアリングが実施されました。学生支援センターが実施するパブリックヒアリングとは一体どのようなものなのか、実際に今出川校地の会場を訪れ、その様子を取材してきました。

○パブリックヒアリングとは？

あまり聞きなれない言葉ではありますが、一般的には「行政機関等の団体が住民等の関係者の意見を施策に反映させるために行われる公聴会・意見交換会」を指す言葉として使われているようです。実際に今回の開催案内にも「みなさんから大学に対するご意見を広く伺う機会です」と説明されていたことから、同じニュアンスの催しとして実施されていたことがうかがえました。

○いつ・どこで行われていた？

5月8日（水）に京田辺校地のローム記念館劇場空間、5月10日（金）に今出川校地の良心館地下のサンクンモールにてそれぞれ昼休みの時間帯に開催されていました。いずれもいわゆるオープンスペースであり、パブリックヒアリングに参加する学生だけでなく、それぞれのスペースを利用して休憩・昼食をとる学生も多く見られ、人が流動的に入れ替わりながらパブリックヒアリングでのやりとりに耳を傾けている印象でした。

○誰が出席していた？

学生支援センターが実施するパブリックヒアリングということもあり、学生支援センター所長がすべての質問に対応していました。学生支援センター所長以外にもいくつかの担当部課からも補足説明が行われるなど、意見・質問に対して真正面から聞くという姿勢が見受けられました。

<学生が利用できるサービスに関すること>
・2校地間シャトルバスについて、一部の時間帯のバスがなくなったことにより、これまでできていた校地間移動が不便になってしまったので、元に戻してほしい。
・学生会館のインターネット環境について、Wi-Fi環境を整備してほしい。それぞれの校地にいる団体メンバーとのネットミーティングすらまともにできないため、改善してほしい。

<授業、履修登録などに関すること>
・今年度から新たに始まったDO Weekについて、たとえば登録がまだ確定していない先行登録科目で配信されたオンデマンド動画内で課題が設定されているケースがあり、履修できるか確定していないタイミングでの課題については、教員・学生双方にとって不確定な要素があり、仕組み上馴染まないのではないか。制度として検証してほしい。

<課外活動への支援に関すること>
・体育会については、クラブ数・会員数ともに過去と比較して増加しているが、補助金や練習環境の改修などがそれに伴っておらず、状況改善を行ってほしい。
・課外活動団体に割り当てられているBOX（練習場含む）について、たとえば利用可能時間の延長や、練習環境の整備についても改善してほしい。
・4月のオリエンテーション期間に実施する課外活動団体の勧誘活動について、例年と比較して十分な勧誘活動ができなかった。従来の期間だけではなく、5月や秋学期などの別期間にも団体アピールができる機会を設けてほしい。

<キャンパス内の施設に関すること>
・新町キャンパスの育真館がなくなり、今出川の体育施設がなくなってしまったが、今出川における体育施設は今後どうなるのか。
・今出川校地図書館建て替えに伴って、別の建物で図書館機能が運営されているが、たとえば閉架資料取得手続きが煩雑になっており、何か改善策はないのか。

<大学全体の政策決定に関すること>
・大学としての政策決定が行われる際には、学生の声が考慮されているのかが学生側から確認することができないと感じている。学生の声の届け方についても制度化されたものはないのか。

○学生から出された意見・要望への大学の対応は？

両校地でそれぞれ開催されたということもあり、2校地間シャトルバスに関すること、Wi-Fi環境の整備に関すること、大学の政策決定時における学生の声の取り扱いに関することなどは両校地で意見・要望として出たようです。特に2校地間シャトルバスについては、今出川校地だけでも3名の学生が発言しており、それだけ学生の関心も高く、学生の日常生活に少なからず影響を与えていることを表しているのかもしれません。

学生からの意見・要望はバリエーションに富んだ内容という印象でしたが、回答者である学生支援センター所長は、いずれの質問に対しても根拠や具体的事例を添え、淀みなく回答していた姿が印象的でした。また、この場で出された意見に対しては、しかるべき会議体や担当部課に責任をもって伝達すると述べたり、具体的に部署を指定して相談を持ち掛けるよう促したり、学生の言葉に対して真摯に向き合おうとする姿勢が一貫して見られました。

○パブリックヒアリングの意義とは？

今回、今出川校地でのパブリックヒアリングに参加した印象として、当日は限られた時間での実施ではありましたが、延べ12名の学生が次々に質問を投げかけており、これは日頃、大学に対して意見を発する場がないことの裏返しなのかもしれません。学生から「大学の政策決定には学生の声が届いているのか」という質問がでていたことも考えると、今回のようなパブリックヒアリングの場が定期的に行われることが、より大学と学生間の対話の促進につながるのではないでしょうか。そして、その対話がきっかけとなり、学生と大学双方にとってよりよい改善につながるようであれば、そこには大きな意義があるように感じました。また、このような対話の場が提供されることが学生の個性を伸ばし、学生のさらなる成長を促すきっかけにもなるのではないでしょうか。

イマデガワの夏をめぐる。

Vol.100 SUMMER

異国を感じられるタイ料理屋さんと
夏にぴったりなレモン料理専門店。
美味しいご飯でお腹を満たして、
今出川の夏を満喫しよう！

店内のインテリアはもともとタイで雑貨を扱っていたオーナーが現地で仕入れてきたもの。その内装に懐かしさを感じるタイ出身のお客様も多いという。

THAI RESTAURANT E-san

〒602-0033
京都市上京区今出川通烏丸西入今出川町 325

CLOSE 火・年末年始
（8/12 から 9/12 まで店舗休業期間）

地下鉄「今出川」駅から徒歩 1 分

11:00~15:00（14:20 最終入店／ 14:30 L.O.）
17:00~22:30（21:50 最終入店／ 22:00 L.O.）

長年愛され続ける、本格タイ料理店

地下鉄今出川駅から徒歩1分の場所に位置する「タイレストランイーサン」。このお店で人気なのが、リーズナブルに楽しめる日替わりランチバイキング。日替わりの料理、サラダ、デザート、ドリンクが並ぶ他、「本日の一品」がついてきて、頻繁に通うファンも多いのだとか。スパイスが癖になる本場の味を堪能できる。またお料理の辛さは食べやすいよう少し控えめにしてあるので、辛い物が苦手な方でも安心。もちろん辛い物好きの方も、卓上調味料で好みにあわせた味付けを楽しめる。「有名ホテルや海外でも経験を積んだタイ人シェフが、お肉の下処理やソースづくりも含めて丁寧に調理し、本格的なタイ料理を提供しています」と店主は語る。

また、大人数での宴会にもぴったりだ。ディナータイム限定の宴会コースもあり、人数や予算、好みに合わせたお任せ料理を提供してくれる。なおボリュームたっぷりの料理は事前に量を調節することも可能だ。

手軽に豊富なメニューを楽しめるランチバイキングと、貸し切り空間で食事が楽しめる離れの利用、そしてもちろん単品でも100を超えるメニューの中から好きな料理を気分にあわせて選べたりと、多くのシーンに合わせた楽しみ方ができる。

今年で30周年を迎えるこのお店には学生や国内外からの観光客、地元の常連客など幅広い客が足を運ぶ。そんな長年愛される本場の味をぜひ味わってみてはいかがだろうか。

ちょっぴりぜいたくな離れでも料理を堪能

お店の横の路地を抜けた先に、京町屋を改装したイーサンの離れが現れる。事前に予約すると貸し切り利用が可能だ（※6名～、ランチバイキングの注文は不可）。畳と襖のある落ち着いた空間で他の客の目を気にせずに料理を楽しむことができる。

本場の味を楽しめる！

▶ランチバイキング ￥1500（税込み）
※混雑時は 1 時間制

カプリ食堂 Limone Verde 今出川御所店

〒602-0933
京都市上京区武者小路町 451-2 NEST 1F

CLOSE 年中無休

地下鉄「今出川」駅から徒歩 5 分

11:30~15:00（L.O. 14:30）
17:30~23:00（L.O. 22:30）

「どんなシーンにも使えるお店にしたい」

今出川通りの喧騒を抜け、閑静な住宅街を数分歩くとカプリ食堂にたどり着く。店内では休憩時間中の社会人、デート中のカップル、一人で読書を楽しむ常連など、それぞれが思い思いの時間を過ごしていた。目を引く外観ながらもどこか親しみやすい雰囲気を持つこの店は、五条に一号店を持つレモン料理専門店で、国産の瀬戸田エコレモンをふんだんに使った料理を楽しむことが出来る。

飲食店というつながりを通して

捨てられるレモンを使ったお酒を販売したり、ミュージシャンにレモンをテーマに歌を歌ってもらい利益を分配するなど、コロナで打撃を受けた人達の助けになろうと様々な活動を行っている。百貨店に出店すると、店の常連ミュージシャンのファンが商品を購入してくれることもあり、逆に助かっているのだそう。「現代版のご近所付き合いってきっとこんな感じなんでしょうね」とマネージャーの山田さんはにこやかに語っていた。

イタリアのカプリ島をイメージした店内。味覚だけでなく、視覚でも楽しめる！

京都初のレモン料理専門店

今回いただいたのは塩レモン油淋鶏。塩レモンを使用したつけダレに一晩以上漬け込んだお肉はとても柔らかく、添えられたレモンもそのまま食べられるほどに美味。広島県生口島の農家から買い付けたレモンはワックス不使用のため、栄養のある皮まで全て料理に使用しているとのこと。付け合わせや調味料として、ときにはドリンクとして。料理ごとに異なる表情を見せるレモンを余すところなく堪能できる。

爽やかな香りが食欲をそそるレモン料理、この夏一度は食べてみるべきだろう。

塩レモン油淋鶏 ￥930（税込み）

学生や社会人でも満足できるボリューム！

新入生歓迎 特別講演会レポート

芥川龍之介賞受賞作家
綿矢りさ氏講演会

インタビュアー
玉井史絵　学生支援機構長（GC学部教授）

作家　綿矢りさ

1984 年京都府生まれ。2001 年『インストール』で文藝賞を受賞しデビュー。2004 年『蹴りたい背中』で芥川龍之介賞受賞。2012 年『かわいそうだね？』で大江健三郎賞、同年に京都市芸術新人賞、2020 年『生のみ生のままで』で島清恋愛文学賞受賞。最新刊に『パッキパキ北京』がある。

4月9日、同志社大学今出川キャンパスの良心館107教室で、綿矢りささんによる新入生歓迎特別講演会が開催された。インタビュアーは、学生支援機構長を務めるグローバル・コミュニケーション学部教授　玉井史絵先生。会場には大勢の学生と一般来場者が集まった。

綿矢さんは久しぶりに耳にしたアンジェラ・アキさんの1曲「手紙～拝啓十五の君へ～」に感動され、その曲中の「自分の声を信じ歩けばいいの」という歌詞を紹介。この「自分の声」とは何なのか。「自分の声を聞く」ということをメインテーマに、ご自身の体験談を交えながらご講演いただいた。その一部をご紹介する。

自分の声を聞くこと

「自分の声」とは何なのか。このことについて綿矢さんは、周囲に合わせて我慢している自身の本音であり、それならばその「声」を尊重することでつらい気持ちから立ち直り、やり直すことができるのではないかと語られた。

19歳で芥川賞を受賞した綿矢さんは、当時自分自身に対して持っていた理想に近づくため、感じの良い振る舞いを心がけていたと話す。ある日、大学からの帰宅途中に見知らぬ人から握手を求められ、とっさに「嫌です」と断った綿矢さん。そのあとに断ったこと、そっけない態度をとったこと、傷つけたかもしれないことなど、長い間気に病んでいたが、今ではその時にちゃんと「自分の声」を聞いた自分を褒めたいと語る。

「感じの良い発言をする人は、賢いと言われたり好かれたりするし、いらんことを言ってしまう人は、失言野郎だとか言われて信用をなくしたり、責められたりします。でもいまこの歳になって、思っていることを言わないことと、言うことに、そんなに違いはあるのだろうかと思います。笑顔だろうが、言葉は優しかろうが、嫌だと思っていることは一緒なら、それが1番の答えのような気がするのです。」（綿矢）

これはあとの質疑応答でも詳しく語られたが、世界には（悪い行為を実行しなくても）思うだけで罪になるという宗教が存在することを知ると、笑顔だとしても本心では違うことを思っているような生き方をしている人が果たして本当に良い人なのか。そう疑うようになったという。

「言ってしまった方が、人に分かってもらえることもあり、悪いことではないなと感じたんです。」（綿矢）

いま大半の人が思い込んでいることも、「時代が変われば常識も変わる」「人はこう言うけど、自分はこう思う」。そんなささやきに耳を傾けられるのは自分自身しかおらず、その声をキャッチして行動することも私たちの生まれた意味の一つに入るのではないかと綿矢さんはそう語った。

異文化体験

「自分の声」に耳を傾けるという大切なメッセージを語ってくださった綿矢さん。その後は玉井先生との対談形式で学生時代や異文化体験、歳を重ねて分かったことなどを話された。

対談では玉井先生から、初めて京都で暮らす学生へ、どのように馴染めばいいのかアドバイスを頂けないかとの質問が出た。これに対し綿矢さんは、家族から離れて違う土地で暮らすことへの不安感に共感されつつ、『なじまなきゃ』と思わずに気の合う人を見つけて、好きなように生きた方が学生生活を楽しめる」と語られ、まさに新入生歓迎のこの講演会にぴったりのアドバイスを聞くことができた。

話は異文化体験に変わり、綿矢さんの最新作『パッキパキ北京』は、実際に綿矢さんが北京に半年間住んだ経験をもとに書かれたもので、異文化体験の持つ意味について語られた。

異文化の土地にいるときはそこに馴染めていない気がしても、振る舞いや考え方といった「目に見えない価値ある経験」が自分に染みついていると綿矢さんは話す。

「（コロナで）ずいぶん不安な思いをしましたが、いま日本に帰ってきて思うのは、やはりその時代の、その場所でしか得られない経験が出来たということです。」「もしその時は失敗したなと思っても、日本に帰ってきて少し経って思い出したりすると、自分の中で糧になっていると感じることもあると思います。（みなさんへ）そういうメッセージを送りたいですね。」（綿矢）

関西弁でお話しされたこともあり、堅苦しさはなく、会場は終始なごやかな空気であった。そのためか、質疑応答の時間では次々に学生の手があがった。

理想の自分になれないことを受け入れるのが怖いという学生からの相談へは、「理想の自分になれなくてもいつか自分のオリジナルを見つけられるときが来る。そのオリジナルは苦労した自分だけが手に入れられる本当に大切なものだ」と綿矢さんはそう話す。趣味で小説を書いている学生からの質問も飛び出すなど、様々な学生が悩みや気になることなどを綿矢さんへ問いかけ、それに綿矢さんは時間ギリギリまで熱心にお答えくださった。新入生だけではなく誰にとっても今回の講演は興味深い話をたくさん聞くことができた有意義な時間となった。

（2024年4月9日　同志社大学今出川校地にて）

おしえて！私の クラブ・サークル活動

Vol.1 茶道部

長い歴史と共に歩む道

昼間の喧騒から遠ざかり、クラーク記念館よりもさらに奥へと進んだ先に現れたのは、青い葉が茂る垣根に囲まれた小さな茶室「寒梅軒」。決して豪奢な造りではない、慎ましやかな静寂を纏ったそこが、同志社大学茶道部の活動場所である。

今年で創部88年を迎えるという茶道部は、同志社大学の中でも重厚な歴史を持った部活動の一つ。現在は茶道に関する経験値も様々な約60名の部員達が、およそ2ヶ月ごとに行われるお茶会に向け日々稽古に励んでいるそうだ。

こちらが自慢の茶室「寒梅軒」

日本文化の体感を京都の地で

「京都の茶道部だからこそ、上質で貴重な経験を積むことができると思います」そう語ったのは茶道部幹事長の高岡さん（3年生）。日本文化の中心地ともいえる京都で設ける茶席だからこそ、他とは違う体験ができるところも魅力の一つだという。大学進学を機に一人暮らしをはじめた学生が「せっかく京都に来たのだから日本文化に触れたい」という理由で入部することも少なくないそうだ。

畳、床の間、縁側、庭園、そして茶道。絵に描いたような日本文化が凝縮されたこの一角で過ごす4年間は、彼らにとって格別なものとなることは間違いないだろう。

流れゆく日々に立ち止まる瞬間を

大学生活というものは膨大な時間と情報にあふれ、目まぐるしく変わる日常の繰り返しだ。そして気が付けば、いつのまにか一年が終わってしまう。高岡さんにとって茶道部とは、そんな忙しない日々の中で、一つ静かに呼吸を整えられる瞬間であり、自分自身と真摯に向き合い、成長できる大切な場所だという。澄んだ空気が流れて寒梅軒で過ごすような非日常的な世界は、その人本来の落ち着きを取り戻させてくれる、誰にとっても必要な空間なのかもしれない。

Vol.2 Meahula Nohealani

南国の景色を表現する

異国情緒あふれる曲が流れる中、色とりどりのスカートをはいたフラダンサーたちが、なめらかな動きで体を揺らす様子は、さながら南国のビーチを想起させる。

彼女たちは同志社大学フラダンスサークル「Meahula Nohealani（メアフラノヘアラニ　通称：メアフラ）」。大学からフラダンスを始めた部員がほぼ9割を占めるメアフラは、本場ハワイで修業を積んだ指導者のもと、日々練習を重ねている。

華やかな衣装を纏ってパシャリ！

努力と憧れの先に

今回お話を伺った代表者の江見さん（3年生）に、これまでで一番の思い出を尋ねると「今年2月に開催された全国学生フラ・フェスティバルです」と迷いなく答えてくれた。これは名作として名高い映画『フラガール（2006）』の舞台となった、福島県いわき市で毎年開催される一大イベントだ。

その中でも特に印象深いのは、ステージで着用した純白のドレスだという。彼女らの動きに合わせて白波のように揺れる真っ白なドレスは、メアフラが代々受け継いできたものらしい。そしてこれは、3年生だけが着ることを許される全部員の憧れなのだと江見さんは語った。

1年生のころから夢見た衣装と共に、日本のフラダンスの聖地とも言える場所で踊った特別な思い出。それは真摯にフラダンスと向き合ってきたからこそ、経験できたものなのだろう。

繋がる絆と今の想い

フラダンスとは団体競技。ときには数十人で壇上に立つこともあるということで、チームワークは必要不可欠な要素となる。長い時間を共にする仲間たちとの間で、絆がつくられていく過程は、フラの魅力の一つだそうだ。そんなフラダンスを愛する江見さんにとって、フラダンスとは「青春」なのだと教えてくれたときの彼女の笑顔は、常夏の太陽のように輝いて見えた。

出張版

Doshisha Sports アトム

体育会の情報誌「同志社スポーツアトム」がイマ＊イチに出張掲載
体育会の活躍をイマ＊イチの読者にもお届けします。

アメリカンフットボール部

5月12日に MK TAXI FIELD EXPO（大阪府）で第78回定期戦 対立教大戦が行われた。関東の1部リーグ相手に14－0で白星を飾り、3連勝を収めた。

同志社のレシーブで試合がスタートするも、攻撃権の奪い合いによりシーソーゲームが続く。中盤、太田原のインターセプトで盛り上がるが、両者無得点のまま第2Qへ。

▶TDを決めた久場

第2Qは序盤に流れをつかまれた。しかし残り1分36秒、佐々木が自らボールを持ち9ydのランプレーが成功。勢いに乗りたいところだったがファーストダウンを更新できず、0－0で前半が終了した。

先制点を取りたい第3Q。均衡状態が続いたが残り3秒、佐々木から脇田の19ydのロングパスが成功。勝負の行方は第4Qに持ち越された。

最終Qは自陣38yd付近から攻撃が再開。相手に攻撃権が移る場面も何度か見られたが残り5分7秒、佐々木から羽入の約40ydのロングパスが成功する。そのままエンドゾーンへと飛び込みTD（タッチダウン）。「佐々木さんと練習でずっと合わせていたので、それが試合でできて良かった」（羽入）と喜びをあらわにした。続けて残り1分52秒、久場が20ydのランプレーを成功させ、相手陣13ydまで接近する。残り58秒、またも久場がランプレー。ゴールラインまで走り抜きTDを決めた。最後は流れをつかみ14－0で完封勝利。粘り強さを見せつけた。

◀パスを出す佐々木

「相手に対して最後の最後まで均衡しながら勝ちきれたことは、チームにとって大事な勝利」（佐々木）。今試合で出た課題を克服し、佐々木組はさらなる飛躍を誓う。

▶歓喜の輪をつくる選手たち

軟式野球部

5月14日、寝屋川公園第1野球場（大阪府）で2024年度関西六大学軟式野球連盟春季リーグ戦が行われた。関大を相手に主将を務める島田のツーランで勝ち越し、3－1で勝利。春季リーグ戦優勝を決めた。

勝てば優勝が決まる重要な一戦で先発を任されたのは成尾。「応援に来てくださった方に感謝の気持ちを持って、チームの勝ちに貢献できるように」と覚悟を持ち、マウンドに上がった。しかし2回には2死三塁の場面で相手8番に適時打を浴び、先制点を献上。手痛い失点となった。一方の打線はその裏、1死から柳瀬がサード方向へのゴロを足でヒットにし、大和に打席が回る。「何としてもここで打ちたい」（大和）。センターの頭上を超えるタイムリーを放ち、1－1の同点とした。

試合は6回に大きく動いた。1死から吉原がバントヒットで出塁すると、打席には島田。直球を力強く振り抜くと、打球はレフトフェンスを悠々と越えるツーランに。主将の本塁打で均衡を破り、勝ち越しに成功した。7回からは守護神・唐木がリリーフ。抜群の安定感を見せると、最後は三塁手へのゴロを打たせて試合終了。9季ぶりのリーグ優勝が決まり、選手たちは歓喜の輪をつくった。

「長かった」（島田）。2月に代替わりし、試行錯誤の日々を歩んできた。それでも共に歩んできた仲間がいたからこそ、5年ぶりのリーグ優勝を果たすことができたに違いない。しかし、島田組にとって関西制覇は夢への通過点だ。「まだ志半ば」（島田）と語るように、チームはすでに目標の「全国制覇」に照準を合わせている。全員でつかみ取った挑戦状を手に、強豪ひしめく夢舞台に挑む。

▶自らの一打でチームを優勝に導いた島田

CAMPUS INFORMATION

継志寮“夏まつり”

同志社大学継志寮にて「夏まつり」を開催します。
地域のみなさま、小さなお子さまから中学・高校生、大学生、大人の方どなたでも、寮生が準備した手作りの夏まつりでお迎えします。
ヒーローショー、ジャグリングやのど自慢大会、またキャンドル作り、スライム作り体験や人力車に乗れたりもします！
暑い夏にはかき氷が一番！
ワッフル、チュロスも用意する予定です。
事前申込不要です。お友達をお誘いあわせの上お越しください。

日時：2024年8月10日（土）13：00～16：00
場所：継志寮（上京区新町通今出川下ル両大寺殿町345番）
※駐輪・駐車場はございません。
※入場無料、一部食品は有料となります。

今出川校地へ自転車通学をする在学生のみなさんへ

自転車入構許可シールを貼り替えてください！

今出川校地（今出川・新町・室町・烏丸キャンパス）に自転車を駐輪するには、2024年度自転車入構許可シールの貼付が必須となります。当該年度シールの貼付がない自転車は駐輪不可となり、移動の対象となりますのでご注意ください。

◆2024年度新入生・自転車マナー講習会未受講の方は学生証を持参のうえ、寒梅館IF学生支援課窓口にてシールの交付手続きを行ってください。

◆そのほかの在学生の方は各キャンパスの門衛所にてシールを交付しています（学生証提示要）。

自転車は必ず施錠しましょう！

学内駐輪場で自転車盗難が多発しています。ご自身の自転車を守るためにも、短時間でも必ず施錠をしてください。また盗難防止のため、2024年7月から無施錠の自転車には大学で準備したワイヤー錠による一時的な施錠を実施しています。解錠には学生支援課での手続きが必要となります（閉室時間中はお近くの門衛所へお声かけください）。

今出川校地学生支援課（開室時間　平日9：00-11：30/12：30-17：00）
Tel：075-251-3270　Mail：ji-gakse@mail.doshisha.ac.jp

火曜日には名作を観よう！

CLOVER THEATER

開講期間中の毎週火曜日、寒梅館クローバーホールでも
映画上映を中心とした催しを開催
会場　**寒梅館クローバーホール**（今出川校地　寒梅館地下１階）
料金　**入場無料**　＊一般の方もご参加いただけます。

イタリア　ネオレアリズモの世界
ロッセリーニを中心に

◎開場は各回 15 分前

1940 ～ 50 年代にイタリアで人々の現実を描き出したネオレアリズモ（新現実主義）。
先駆者の一人であるロッセリーニ監督を中心とした特集です。

7 月 2 日（火）
① 15:15『**火刑台上のジャンヌ・ダルク**』
② 18:30『**不安**』

7 月 9 日（火）
① 15:15『**ストロンボリ**』
② 18:30『**イタリア旅行**』
＊上映後、**北小路隆志教授**（映画批評家・京都芸術大学藝術学部）によるレクチャーあり。

木曜日には何かがある！

WHAT'S ON THURSDAYS

木曜日には何かがある！　を合言葉に 開講期間中の毎週木曜日
寒梅館ハーディーホールにて 映画上映やコンサートなど様々なプログラムを開催します
＊春学期の WOT は終了いたしました。秋学期は 10 月より再開いたします。

CLAP

観る立場から表現する立場へのシフトのキッカケになるような
演劇・音楽などのワークショッププログラムを開催します。

メサイアシンガーズ（女声）公募します
同志社メサイア完全復活！

第 57 回全同志社メサイア演奏会
公演日：12 月 25 日（水）　開場 17:00 ／開演 18:00
場　所：京都コンサートホール 大ホール
指　揮：山下 一史
出　演：同志社交響楽団・同志社グリークラブ・メサイアシンガーズ
主　催：全同志社メサイア演奏会実行委員会

参加申込はこちら

練習日：9 月 18 日～ 12 月 18 日の毎週水曜日（他日程練習有：指揮者練習等が数回あります）
時間帯：18 時半～ 21 時ごろ
練習会場：寒梅館ハーディーホール他（寒梅館地下 1 階）
申込期間：6 月 28 日 (金) ～ 8 月 26 日 (月)
募集人数：女声・大学生、院生、2017 年度～ 2020 年度入学の本学卒業生、同志社教職員 40 名
参 加 費：大学生、院生　2,000 円
2017 年度～ 2020 年度入学の本学卒業生、同志社教職員 10,000 円
＊参加費は初回練習の際にお支払いいただきます。
＊参加費のほか、楽譜代の徴収があります。
＊プログラム参加途中でご辞退される場合、参加費等の返金は行っておりませんので、ご了承下さい。

＊参加希望者が多い場合は、同志社大学学生を優先した上で選考を行います。
＊合唱経験の有無は問いませんが、メサイアの習得にはかなりの集中力と時間を要します。
本ワークショップの練習に集中して臨むことができる方を募集します。
＊寒梅館に一般用の駐輪場、駐車場はございません。卒業生や他大学生は公共交通機関でお越しください。

主催・お問合せ
同志社大学今出川校地学生支援課
TEL 075-251-3217（ホール担当）　E-mail ji-gakse@mail.doshisha.ac.jp
＊諸事情により内容が変更になる可能性がございます。ご了承ください。
＊ご来場の際は公共交通機関をご利用ください（駐車場・駐輪場はございません）。
＊ホール内は飲食禁止です。ご了承ください。
＊未就学児の入場はご遠慮ください。

寒梅館ホールスタッフ
インスタグラム↑

CLAP メイキング取材

演劇・音楽など、普段挑戦する機会が無いけれど、気になっていた世界を体験してみたい…そんな声に応えて 2004 年度春学期からスタートしたプログラム、CLAP。今回の取材では、5 月から始まった演劇ワークショップ 2024「あなたにふれる わたしにであう」の講師のお一人、高杉征司さんにお話を伺った。

演劇ワークショップ 2024

あなたにふれる わたしにであう

舞台上で起こったことを全て受け止める

高杉さんは同志社大学を卒業後、俳優として活動しながら数々の劇団を旗揚げし、WANDERINGPARTY代表、京都舞台芸術協会理事、サファリ・Pの俳優などを務めた鮮やかな経歴の持ち主だ。現在は主にフリーランスの演出家としてアーティストの職能を活かし、ワークショップなど様々な場で活動を行っている。そんないわゆる「実力派」の高杉さんにさっそく今回のワークショップについてお聞きすると、にこやかな表情を浮かべながらも熱く想いを語って下さった。

今回取材させて頂いたのはこの方！

高杉征司 さん

演出家・劇作家・俳優
1975 年生まれ。広島県出身。
演劇と日常、私とそれ以外、そんな境界を疑い、
シームレスにすることに興味を示している。
舞台の上でも具象と抽象のはざまを彷徨っている。

「私は皆さんに『こう』なってほしいという個人的な理想は持っていなくて。あくまで私は場をつくる側なんです。皆さんが『なりたい自分の選択肢や可能性を広げられる』、そんな場をつくる人というか。舞台上で起こったことを全て受け止めて、そこで起こったことをフィードバックしていく。それがこのワークショップの特徴ですね。今回も私が書いた詩のようなものでテキストは構成されていて、それをダンサーと私と受講者の皆さんと一緒に、この場でどうすれば形になっていくか、面白くなっていくかということを実験のように舞台上で繰り広げていくんです。台本があると設計図としてある程度どんなものが出来るかは想像がつくけれど、今作は完成図があまり想像できない、やってみなきゃ分からない面白さと怖さがある。そんな中で、彼ら(受講者)の身体や精神や経験、言葉を出来るだけ舞台上に引き出したいんです」

「ありのまま」を受け入れる場をつくりたい

「演劇ワークショップ」に来るのだから、受講を希望する人はほとんどがきっと声を出したり演技をしたりするのが好きな人、得意な人なのだろう…そう思って高杉さんにお聞きすると、意外な答えが返ってきた。

「面白いのが、演劇が得意！やりたい！という人ばかりが来るのではなくて、すごく苦手な方が望んで来られることも多いんです。でも、声が出なくても社交的でなくても、明るくなくても良いからそれを『受け入れる場』を私はつくりたい。全然誰とも喋らなくてもいいし、声が小さくてもいい、それをありのままに受け入れて、じゃあそれをどんな風に『芸術』として作品を作っていこうかと一緒に考える。で、そういうことを通した結果、それを克服できたら儲け物くらいの感覚でいいんです」

触れる。見つめる。身体を動かす。声を出す。「自分」が自然体で行うそんな当たり前で本能的な行為が、舞台上ではひとつの「表現」になる。演劇と聞いて私達がつい想像してしまう台本通りの堅いものとは一線を画す、アーティストとして、いち表現者として様々な舞台を渡ってきた高杉さんならではの視点が生きた新しい世界がそこにはあった。

今回のワークショップは、学年や学部の違う学生たち、そして院生、留学生が総勢22名、公募で集まった。期間は5月のゴールデンウィーク明けの水曜から毎週1回、計9回のワークショップで高杉さん指導のもと演劇作品を制作し、7月7日のイベントにて発表予定だ。

INFORMATION

寒梅館たなばた（summer）芸術祭

7 月 7 日の七夕に、寒梅館でダンス、音楽、演劇のイベントを開催します！大学公認団体である Meahula Nohealani のフラダンス、同志社交響楽団の演奏、そして学生支援課主催演劇ワークショップ 2024 で制作した演劇作品、『海に浮かぶ一滴の水』（作・演出：高杉征司　振付：高木貴久恵）の上演を行います。一般入場無料のイベントとなりますので、是非お誘いあわせの上、お越しください！

日時	7 月 7 日（日） 13 時半開場　14 時開演
会場	寒梅館ハーディーホール（今出川校地　寒梅館地下 1 階）
料金	無料
問合せ	今出川校地学生支援課ホール担当 Tel： 075-(251)-3217　Mail : ji-gakse@mail.doshisha.ac.jp

ボランティア支援室だより

ボランティア支援室では、初めてボランティア活動をおこなう学生も参加しやすいボランティアプログラムや講座などを開催しています。今回は「はじボラ」と「ボラカフェ」についてご紹介します。

はじボラ

はじボラとは「ボランティアしたいけど一歩を踏み出せない」「一人で参加するのはちょっと･･･」という不安があっても、大学主催のプログラムで、活動経験のある同志社生が一緒に参加するので、安心して気軽に参加できるプログラムです。地域のボランティア活動を体験できるチャンスです！
はじボラに参加して、その後継続的に活動に参加している方もいれば、いろんな活動を探してボランティア経験を積んでいる方もいます。
夏休み以降も開催予定です！何かしてみたい・・・という方はぜひご参加ください。

ボランティア
プログラム

ボラカフェ開催報告

ボラカフェは、ボランティアに興味はあるけれど一歩踏み出せない、何から始めたら良いかわからず行動に起こせていないという学生を主な対象に、参加者それぞれの疑問や不安を解消しながら、活動を探したり、活動経験者の話を気軽に聞ける場として、定期的に開催している企画です。

当日は簡単な自己紹介を行い、はじめに活動経験者の先輩からボランティアを始めたきっかけや、活動に参加してみての感想などを伺います。その後は、話を聞いてみての質問をしたり、他にもどんなボランティアがあるのか情報をお伝えしたりするなど、その時々の参加者に応じて、いろんな話をしています。

参加者の声

「なんとなくボランティアしてみたいと思っていたけど、今回ボラカフェに参加してみて、いろんなボランティア活動があることを知れてよかった」

「単発でも参加できる活動があるということを知れて、何か参加してみたいと思った」

ボラカフェを通じて実際に活動の参加につながった学生の方もいます。
お昼休みにご飯を食べながらお話しできる場です。ぜひ気軽にお立ち寄りください。
【次回：7月4日（木）開催予定】

＼最新情報はInstagramをチェック／

ボランティア支援室Instagramでは、ボランティア相談受付時間や最新のボランティア情報などを発信しています。時々、地域の情報などやオススメボランティア情報をストーリーにて配信しています。フォローよろしくお願いします！

MONTHLY COLUMN
by imaichi

私とイマ＊イチ

今月号で 100 号を迎えたイマ＊イチ。
記念すべき 100 号は、24 年度編集長と 23 年度編集長による
スペシャルなコラムです。

イマ＊イチがくれたもの　24 年度編集長

今号でイマ＊イチは 100 号を迎える。このような節目となる時に編集長としてイマ＊イチに携わることができとても嬉しく思う。思えば私は大学 1 年生の時からイマ＊イチにカメラマンとして関わってきた。大学入学当初はここまで活動にのめり込むと思っていなかったが、いつの間にか編集長としてコラムを書いていることに驚きを隠せない。

イマ＊イチは私に大学生活で打ち込むことができる機会を与えてくれたが、それ以外にも新しい挑戦への扉を開いてくれた。例えば、初めて取材に行った日、期待と緊張の入り混じった気持ちとともにカメラを構えたことを今でも鮮明に思い出す。このような経験を通じて多くの人との縁に恵まれ、充実した大学生活を送ることができた。

残り編集長として制作に携わる 2 号と、そのあとの 4 号で後輩たちが素晴らしい出会いを経験できるような環境を作っていきたいと思う。

つなぐ　23 年度編集長

緊張なのか暑さなのか、滝のように流れ出る汗をふきながら初めての取材へ行ったのは、2 年も前のことになる。自身が感じたありのままを文章に表現し、それが読者の方に伝わり、反応をいただける。その難しさとライターのやり甲斐を実感した瞬間であった。

また昨年度は編集長として、これまでとは違った視点から『イマ＊イチ』に携わった。100 号も続く長い歴史の重みを感じながら、その歴史に恥じない革新を目指して編集部全体で奮闘した。こうした取り組みの中で、昨年度に新たに生み出すことのできた新企画が『つながり』である。読者の方からも高評価をいただいたこの企画を通じて、新たな今出川の一面を伝えることができていれば幸いだ。

時代が目まぐるしく変化するように、『イマ＊イチ』もコンセプトや形式の変化があるのは当然のこと。どんな形であってもこれまでの 100 号という長い歴史を胸に、今出川でイチバンの地域情報誌という壮大な想いを今後も繋いでいって欲しい。

100th
memorial number

今後のイマ＊イチへの
意 気 込 み

《編集長》《チーフカメラマン》佐々木瑠偉
カメラマン（特別企画 / クラブ・サークル活動紹介 /CLAP）
ライター（コラム）
イマ＊イチがより良いものとなるように善処いたします。
何卒よろしくお願いします！

《副編集長》吉政尊盛
積極的に参加したいです！
このままでは終わりません！

《会計》竹中翔悟
デザイナー（パブリックヒアリング / 出張版アトム）
″イマデガワでイチバン″にふさわしいデザインが
できるように頑張ります！

《広報》塚本向日葵
デザイナー・ライター（CLAP）
魅力あるデザインと文章を学ぶ為、これからも沢山
雑誌を読んで研究していきたいです！

《チーフライター》島田真衣
ライター（新入生歓迎特別講演会）
今出川の素敵なところを、もっともっと伝えていきたいです。

《チーフデザイナー》太田夕貴
デザイナー（目次 / 特別企画）
今出川の魅力をデザインを通してたくさん
表現していきたいです！

北村咲良花
デザイナー（ボランティア支援室・コラム）
デザインを通じて地域の素敵な魅力を伝えられるよう
頑張ります！

田中梨沙
デザイナー（新入生歓迎特別講演会）
今出川地域の方々に向けて、これからも耳寄りな情報を
お伝えできるように頑張ります！

雑喉碧羽
デザイナー（特集 p06・p07）
あっという間に 3 年目。大好きなデザインと今出川を
最後までめいっぱい楽しみます！

谷山茉優
デザイナー（クラブ・サークル活動紹介）
制作に携われる限られた時間を大切に。
デザイン力をもっと上げたいです！

山本智天
デザイナー（表紙・裏表紙）
記憶に残るデザインを出力する

池愛莉
デザイナー（編集後記）カメラマン（特集 p06）
今出川の魅力を、写真やデザインで最大限に引き出し、
より多くの人に届けていきます。

鳥井麻衣
ライター（クラブ・サークル活動紹介）
これからも読者のみなさまに今出川の耳寄り情報を
お届けできるよう尽力していきます！

武田宙
ライター・カメラマン（特集 p07）
読んだだけで味や雰囲気まで想像できる、
そんな文章を書いていきたいです！

竹縄朱優
読者の方に響く表現を追求しながら、
今出川の魅力を再確認していきたいです！

岩本花梨
ライター（特集 p06）
まだ経験が浅いので、今後はもっと深く
活動していきたいです！

磯部遥文
ライター（コラム）
次の 200 号創刊に向けて、イマ＊イチのさらなる
バージョンアップに貢献したいです。

堀之内涼
ライター（特別企画）
４回生として、これまでの経験を活かしながら、
今出川の魅力発信に貢献します！

読者プレゼント

7 月号の感想を送っていただいた読者の皆様の中から抽選で 10 名様に
イマ＊イチロゴ入りボールペンをプレゼントいたします。

メールアドレス (2024imaichi@gmail.com) に
1. お名前
2. ご住所・郵便番号
3. 年齢（任意）
4. イマ＊イチ 7 月号を入手された場所
5. イマ＊イチ 7 月号で一番良かったページとその理由
6. イマ＊イチ 7 月号全体を通してのご感想（任意）
7. 上京区でおすすめのお店とその理由（任意）
8. 今後のイマ＊イチに期待すること（任意）

を明記の上、お送りください。
締切：2024 年 7 月 3 1 日
（個人情報の二次使用はいたしません。当選者の発表は、発送をもってかえさせていただきます。）

こちらの QR コードからも
簡単にご応募いただけます！

イマデガワでイチバンの地域情報誌

イマ＊イチ

E1

発行日：2024　年　7 月 1 日

発行：同志社大学　学生支援機構
今出川校地学生支援課
075 - 251 - 3270

編集：同志社大学広告研究会 add’s

2023年度のイマ＊イチも
見られます！

「今出川で過ごす人」のためのフリーマガジン

イマ＊イチ

Instagram

X（旧 Twitter）